

日本言語政策学会 (JALP) <http://homepage2.nifty.com/JALP/> の今年の大会では、手話通訳付きのパネル発表があります。

日時 2007年6月17日(日) 10:00~12:00
会場 麗澤大学(千葉県柏市)【1601教室】 <http://www.reitaku-u.ac.jp/>
参加費: 会員無料、非会員3000円(言語学会会員1500円)、非会員の大学院生1500円

パネル発表:

混乱・模索するろう教育の現場 —教育政策・言語政策のはざままで—

佐々木倫子(桜美林大学)
高浜良友(ろう児保護者)
新井孝昭(筑波技術大学)

木村晴美(NHK 手話ニュースキャスター/国立身体障害者
リハビリテーションセンター学院・手話通訳学科)

はじめに

多様な背景を持つ住民がのびのびと共に生きることができる日本社会の将来を描くとき、現在の日本のマイノリティー政策があまりに多くの問題を抱えていることに気付かされる。特に、ろう者に対する教育の現状は、問題の象徴的存在とも言えるのではないか。本パネルでは、まず、聴者の言語と文化が優先されるろう教育の現場の状況を整理する。ろう児の教育に対して十分な質が確保されていない現実を、ろう教育関係者の証言などから検証する。聴者側が自身の同化主義、自身が引き起こす抑圧に気付いていない現実とその要因を明らかにした上で、ろう者主体の新たな動きを紹介し、今後のろう教育の方向を共に考えたい。

1 佐々木倫子 「ろう教育の現場の混乱」

パネル1では、まず、ろう教育の現場に起きている混乱を、用語の整理、および、4つの視点からの整理を行うことで明らかにしたい。

1.1 聴覚口話法が引き起こす混乱

21世紀の現在でも、聴覚口話法は教育現場で生きている。教育をした側と受けた側の聴覚口話法に対する正反対の認識は、ろう教育の内実を物語る。2006年12月に、ある大新聞に掲載されたふたつの論説の例で混乱を検証する。

1.2 “手話”が引き起こす混乱

大多数の聴者教員の“手話”では、生徒たちの思考力を育てるような対話は成り立たない。にも関わらず、聴者教員の十分な手話能力の育成プログラムは教育施策には含まれず、十分な手話能力を持つろう者教員が教育の中核を担う事も難しい。“手話”の定義とその混乱した現実をまとめる。

1.3 インテグレーションが引き起こす混乱

ろう学校の教育に対する不満などから、一般校へのインテグレーションが進む現状で、ろう児と、級友、担

任などの関係者にどのような混乱が生じるかを見る。

1.4 医療機器が引き起こす混乱

補聴器、人工内耳の進歩は“治すべき存在”である難聴を治すことに成功しているのだろうか。医療機器の進歩が現在どのような混乱を引き起こしているかを実例から考える。

2 高浜良友 「一保護者から見たろう学校」

パネル2では、ろう児の保護者の立場から、現状のろう学校がいかに子供の学校生活の場として不都合な環境であるのか、いかに手話やろう者に対して理解がなされないまま教育が行われているのかを紹介する。

大半のろう学校教員は手話ができない。ほとんどできないか、単語が分かる程度である。ろう者と自由に議論し、抽象概念を扱うことはできない。にもかかわらず、“ろう児を指導する”ろう学校の日常を紹介し、手話の必要性を確認する。

特に聴の保護者にとってろう学校での生活は、ある意味で、ろう社会の入り口であり、ろう者と接するほぼ唯一の機会である。しかし、「ろう者も聴社会に入るのだから」と子供たちを聴者の論理で見、場合によっては交流と称し子供が泣くのを叱咤激励しながら一般学校に通わせることもある例が少なくない。なぜこのような例があり続けるのか。発表では、情報ばかりが先行し、現実のろう者とその可能性を知ることができない保護者の置かれた立場を確認したい。

ろう児が一般の児童生徒と同じように学校生活を謳歌し、やがて社会の構成員となるために必要なことは何か。発音の善し悪しや単語の多寡、聴者への同化体験などではないはずである。手話環境と、互いの個性や考え方が理解できる体験、その上で自身が置かれている環境のマクロ的認識ではないだろうか。発表では、一保護者の立場から、ろう学校が手話環境を持つために今私たちがすべき事を具体的に提案し、行動計画を述べたい。

3 新井孝昭 「ろう・難聴の大学生との現場」

教育においてコミュニケーションが重要なことは言うまでもない。幼児教育において、教員に求められるもっとも大切な力量は、幼児を観察する能力である。黙って幼児の活動を観察して、そこで起きているやり取りが何であるのか、環境とどのような関わりをしているのか、記録を取り予想をし環境を整えていく。幼児の活動を大人側の型にはめるのではなく、幼児から発せられる表現や活動を読み取り、援助をしていくのである。そのような場面場面で重要になるのは、自由意志で操る身体と言葉の存在である。パネルでは、まず、幼児教育における「ことば」の役割を取りあげる。次に、取りあげるのは、ろう・難聴の学生とやり取りをする大学教育でのコミュニケーションの問題である。幼児期から聴者の大人達に囲まれて育ってきた学生達は、学校教育の最後のしわ寄せを大学で味わう。パネルでは、大学でのコミュニケーションがどのような状況なのか、彼らの「ことば」と学校「ことば」の問題を語りたい。

そして、最後に、“手話”を使っていると言う教育現場が抱える矛盾について指摘したい。行き着くところは、教育政策の貧困だが、日本社会の風土的退廃が根底にある。「実践と理論」、「感性と理性」があたかも「現実と理想」、「本音と建前」と対応するように読み替えて恥じない私たち社会の中で、それを身近で許さない実践と理論が求められているのではないだろうか。

4 木村晴美 「新たなろう教育の動きへ」

「ろう文化宣言」(木村・市田 1995) はろう者自らを文化的・言語的マイノリティーとして位置づけ、以後、ろう者らしく生きることのできる社会の実現のための運動が展開されてきた。国の教育政策との関係、インテ

グレーションの推進などで、ろう学校の生徒数の減少が起き、その統廃合が起きている。

このような中で、2003年5月にろう児の人権救済申し立てがなされ、翌2004年5月にろう者主体の、日本手話と書記日本語のバイリンガル教育を目指すフリースクールが開設された。そして、それは、2007年1月の東京都の特区申請でろう者主体の私立学校設立の動きにつながっている。発表では一連のバイリンガル教育の流れを紹介し、しかし、そこにある多くの困難点、問題点にも触れたい。

5. 問題点と討議 全員

ろう教育が直面している問題点の整理、および、パネリストとろう者を含むフロアとの忌憚のないやり取りを、全時間手話通訳つきで行い、今後の方向を考えたい。

注(1) 読売新聞「論点」2006年12月7日

(2) 読売新聞「論点」2006年12月20日

参考文献

木村晴美・市田泰弘(1995・3)「ろう文化宣言 一言語的少数者としてのろう者」『現代思想』青土社、8-17.